

# 『続猿蓑』吟味

——去来・土芳・許六たちの関わり方について——

吉田義雄

## AN INVESTIGATION INTO “ZOKU-SARUMINO”

——What Kyorai, Dohō & Kyoriku Did  
With This Anthology——

Yoshio YOSHIDA\*

### SUMMARY

With regard to the compilers of the “Zoku-sarumino”, last of Bashō’s ‘Seven Anthologies’, the conclusion today is that Bashō compiled it and Shikō, one of his disciples, made some additions to what the former had done. In the course of our reading and appericiation of this anthology, however, we cannot but desire to see into the amount and kind of addition Shiko must have brought.

Some inquiries have been made here into what all those disciples but Shikō had done with this anthology and what attitude they adopted towards it. And Bashō’s letters, Kyorai’s letters and the ‘Kikunoka’, anthology, were among the rare materials of use to this investigation, so far as Kyorai was concerned; and the same could be said of the ‘Akazōshisōkō’ and the ‘Haikai-mondō’, so far as Dohō and Kyoriku were concerned, respectively.

And it has been found that those disciples but Shikō had nothing to do with the compilation of the “Zoku-sarumino”, and, besides this, we have found our way to the conclusion that we must bestow further consideration on the old theory that Shikō added a little to the “Zoku-sarumino”.

### 1

芭蕉七部集最後の集である、『続猿蓑』の撰者についての議論は、いまは一応解決済みの事だとも言へよう。それについての第一資料は芭蕉の書簡であり、中にも元禄七年九月十日付去来宛書簡が、実に明快に様々の疑問点を解きあかしてゐる。例へば、『削かけの

---

\* 国語国文学教室 (Dept. of Japanese Literature and Language)

返事』の支考の越人への反論「此集は、元祿七年の夏、伊賀の東麓庵にて伊勢より先師の来れるを待て、七八兩月の間の密撰也」を裏づけるものとして、書簡の「いせより支考参り候を相手に漸く仕立候」といふことばは、誠に有力である。たとへ伊勢より来つたのが支考の側であり、その伊賀の芭蕉のもとに到つたのが、九月三日の事で、七八月の間とはやや割り切り過ぎた嫌ひがあるにしても、「支考を相手に仕立」たとは、この集への芭蕉と支考の関係の仕方を、明確に示しておほせてゐる。しかも密撰については、元祿七年七月十日付曾良宛書簡に「八月中伊賀にてとくと改め、秋中にも出板可申、他へは沙汰無之、沾圃へ御伝可被成候」とあり、その他へ沙汰無きやう心する理由は、同じく九月十七日付此筋・千川（推定）宛書簡で、「続猿蓑下清書＝懸候。殊之外其角・嵐雪・桃隣家家集をかゝへて最中とんちやくの折節、少づゝあや出来そうにて物むつかしく候故、愚意を加へ候事はふかくかくし申候。尤かまはぬ方能候へ共、前猿蓑集のけがれに成候半をいとひ、しのびに手を入申候」とあるので、大凡が推測されるのである。

更に考へれば七八月の密撰と大まかな言ひ方をした事も、支考はその原稿の大半の構成を伊勢で編み、(勿論芭蕉自身も、自身の腹案を抱きつつ、)それを芭蕉のもとにもたらしたものと推測する事も出来るであらう。

なほ、支考の『芭蕉翁追善之日記』に、

さればふみ月の旅行には六日より雨風はげしくてこの雲津の渡りにとどめられしを、殊に七夕の夜なればとて、それを阻水賦につづりて阿叟へも見せ奉しが、とゝのへて猿蓑の後集にや出すべきと仰せられしを、いかでさる事の侍らん。前集には幻住庵の記あり。此記は天下の人口に膾炙して、長明が記にも先後すべきよし、さる程の事にはなど対し候半とて堅く辞してやみぬ。しかるを阻水その賦の奥に、

羨ましあちら雲津の花薄 支考

伊賀にまかりし時、この五文字有べしとてをきかえ申されしが、撰集の中のまぎらはしさに、かたもなくわすれ果ぬ

と有つて、芭蕉・支考師弟が、『続猿蓑』編纂に、微笑ましく、また或時はいそがはしく、つとめてゐる様が偲ばれるのである。そして支考との密撰といふ事が愈々疑なしと考へられて来るのである。

新資料が出る度に、いつも支考には有利となるのであるが、一群の芭蕉宛の門弟達の書簡(『俳句』昭和三五年 尾形仿氏紹介、『校本芭蕉全集書翰篇』所収)では、『続猿蓑』編纂の資料として、諸方の門弟達が、芭蕉のもとに句を寄せる様が知られ、しかも芭蕉はそれを取捨、添削もして、『続猿蓑』に入集してゐるので、支考偽撰どころか、ますます芭蕉の手が深く加へられた集といふ事が確かめられて来る。

すなはち七月一日付『里東書簡は「粘になる肴も夜の暑さかな」。七月六日付 素覧書簡は三句。八月一日付 利合書簡は六句。八月三日付 車庸書簡は「開キせし人は逃けり蕎麦の花」。八月三日付 洒堂書簡は「秋の日のくるわせけり柿の色」他三句、が芭蕉のもとに寄せられたがそれ等の中『続猿蓑』には、里東の句は「粘になる蛸も夜の暑さかな」と、車庸の句は「起しせし人は逃けり蕎麦の花」と、洒堂の句は「秋空や日和くるはす柿の色」と改められてゐる。「肴」よりも「蛸」の方が奇であり暑さが重くなる。「開キせし」より

「起しせし」の方が聞くに素直であり、「秋の日のくるわせ」よりも「日和くるはす」の方がやはりなだらかな言ひ方でしかも新鮮さは失はれない。芭蕉の推敲によるものであらう。

かうして『続猿蓑』の支考偽撰説は全く捨て去られ、芭蕉の影の濃い集と定まつたのである。実はこれについては荻野清氏の（『芭蕉講座』書翰篇。三省堂版）に論断もあり、やや贅するまでもない事までも記してしまつたが、だがそこで、荻野氏は「まだ支考加修の事実を否定するだけの信念を持たないのだが、併しその加修の程度は出来るだけ軽微なものとするにとどめてよいのではなからうか」と述べ、従来余りにも支考への不信が大き過ぎてはならないかとして、「支考は元禄四年に入門して以来芭蕉の他界するまで忠実に仕へ、その頃の作品や『葛の松原』の著が示すやうに純粋な気持で俳諧に従つてゐる」「支考の立場を考へて伊勢行を決意したほどに芭蕉愛寵の的であつた彼であるし、また臨終の遺書には『支考此度前働驚、深切実を被尽候』といはしめたものであつた。支考の其の精進が、そして芭蕉の所謂「深切」が、実は師の歿後多く時を距てずして、私を図るに汲々たる軽薄なものだつたと見ることはいかゞであらう」と、論じられて、元禄十二年の『続五論』の著の態度の質実さからも『続猿蓑』出板の頃までは、支考はなほ信ずべく、「たとへ支考の加修を否定し切れないにせよ、その程度はなほ稀薄だつた」と見ようとされてゐる。だが、芭蕉の芸術を愛し、その醇正なものを求めようとして行く時、あやしい程に、支考のこの集へのかゝり方が、気になつて来るのも事実である。もつと、それがはつきりしないものであらうか。『続猿蓑』を読む者に取つてはもう一度 そのもやもやしたものをつきつめてみたいと思はざるを得ないのである。

## 2

『続猿蓑』に対して、支考以外の芭蕉の門人たちは、どのやうに承知し、或ひはそれに関与してゐたものであらうか。中にも去来・丈草は『削かけの返事』に、「此集は翁の歿後に再び清書もおそれあればとて、去来丈草を両奉行にて、草稿のままに板行したれば、書で消したる所もあり」と記されてゐる。奉行したとなれば、『続猿蓑』編纂の事情、また草稿の姿、当然目を通してゐなくてはならぬはずである。関与の仕方がそれ程深いならば、その様子が伺はれる何かの資料が見出されさうなものである。ところが丈草についてはその作品（発句九句）が『続猿蓑』に入集してゐるのを見る他、何も見当らない。しかし去来にはさすがに、まず前出の芭蕉書簡がある。それには「いせより支考参候を相手に漸々仕立候」と申述べた後に、「尤下見、板之あらまし、又々貴様御世話被成不被下候ハでハ成申まじく候」と出板に関して去来の世話を申入れてをり、更に、その後に、板下清書の書手の相談、続いて「追付其元へ上せ可申候間」やがて原稿を去来の手許へ送るから、「序文早々御こし可被下候」即ち序文を急いで書けとまで述べてゐる。つまり出板に関するすべての手順を去来に期待し、序文まで望まれては、実篤な去来が当然その斡旋に努力するつもりになつたであらう事は想像される。

まこと、去来は序文を草する事が、芭蕉との間の了解事であつた。が、現在の『続猿蓑』

にはその序文はない。それへの不審は暫く置き、『続猿蓑』が芭蕉の手に依つて既に成つた事を、去来は十二分に承知してゐたのである。

それかあらぬか、元禄十年閏二月、其角に贈られた一書は、

故翁奥羽の行脚より都へ越給ひける比、当門の俳諧已に一変す。我が輩、笈を幻住庵に荷ひ、棒を落柿舎に受て、略そのおもむきを得たり。ひさごさるみの是也。其後又一ツの新風を起さる。炭俵続猿是也。

と書き始められてゐる。

これは風国の『菊の香』(元禄十年九月刊)に載せられ、更に一転して、許六との『俳諧問答』の論争を導くのであるが、『ひさご』『さるみの』『炭俵』とみな書名で、それと並んで『続猿蓑』を挙げてゐるのは、その奥書に元禄十一年五月とある事から、まだこの書が出板前なのに、と、いささかいぶかしい。だが『続猿蓑』既に成る事は、去来は既述の通りよく知つてをり、更に考へられる事は、芭蕉が、

八月中伊賀にてとくと改、秋中には出板可申、他へは沙汰無之、沾圃へ御伝可被成候。(元禄七年七月十日付曾良宛)

などと、ひそかに此の集を編纂してゐるやうであるが、一方「かるみ」の新風を鼓吹するに際しては、関西門人たちには、それをしばしば語つてゐたのではなからうか。そしてその形が成つた頃、やがて病に臥すのであるが、その看病の枕許で、門弟たちの俳談にもしきりと上り、芭蕉の死後も、追悼の会の際などにも語り合はれたであらうし、支考自らも吹聴したとも推量されるし、かたがた、門人たちの間には、『炭俵』以来の新風、新撰集と、共通なイメージが出来上つてゐたのだらうと思ふ。それ故こそ、出板されぬ『続猿蓑』を、新風として、去来は其角に書面で論じかける事となつたのであらう。

去来はそれ程『続猿蓑』に親しみを持つてゐた。しかし門人達の共通理解以上に、内容的にこまごまと知つてゐたとは思へない。『俳諧問答』が展開して行つても、他に『続猿蓑』に言及してゐる箇所はないのである。どうも其角に改まつて書を投ずるに当つて、文の格式から最初に持ち出されただけとさへも考へられなくもない。

ここで、門弟筆頭とも言ふべき其角は、去来の書簡を自著『末若葉』の跋文にそしらぬふりで利用してしまふのだが、それも去来の原文をかなりに変更してゐる。今問題にしてゐるその冒頭は見事に削られて、その次の箇所、

去来問、師の風雅見及ぶところ、みなし栗よりこのかたしばしば変じて、云云

から始めてゐる。『炭俵』『続猿蓑』も削つたが、『次韻』も削り、ただ自著の『虚栗』だけを残したのは大胆不敵であるが、『炭俵』『続猿』の新風論議うるさしと思つたのかも知れない。去来程『続猿蓑』について身につまされるものもなかつたのであらう。

芭蕉が『炭俵』撰の後続いて、書名はまだ未定であるが、『猿蓑』を継ぐ集を編纂する計画のあつた事を、去来が早くから知つてゐたと思はれる資料が、やはり前述の門人達の書簡の一つに紹介されてゐる。元禄七年五月十四日付芭蕉宛去来書簡である。

それは随分の長簡であるが、『炭俵』編纂の為の材料の、去来関係の人達の句を数多く報告してゐる。その後、「下拙句も続集に五句御加入被遊被下候由承候」とある。「続集」が『続猿蓑集』であらうとするのである。報告されてゐる五十句の発句は多くは『炭俵』に収められたのであるが、去来の句十七句の中二句が、『続猿蓑』に入集してゐる。去来は入集する句五句と既に芭蕉から具体的な事まで報らされてゐたもののやうである。(ただし実際の『続猿蓑』の去来の句は六句である。)

なほこの書簡で注意すべきは、

荒壁や裏もかへさぬ軒の梅          素牛

此ハ自集ニ出申候

鑑鮑打跡や板戸の朧月          丈草

此ハ露川ガ集ニ出候

等々、報告した各句が他の集に入つてゐる事をしきりに注意書してゐる事である。そして書簡の後部にも、続集に五句取られる事を述べた後で、

心桂が集に去来取出し候句共多く、近比難儀仕候。若五句の内ニテハ無之やと無心元奉存候。此段ハ前ニ委細御断申上候。発句の事被仰下候以後、一句も外へもらし不申候。

又、末尾に芭蕉の句の事に関すると思ふが、

御集に入候を又外へ出し候はんもきの毒ニ奉存候故、窺申候。

と、句が他集にダブつて入集される事について、神経質な程気を配つてゐる事である。これは、去来と『続猿蓑』との関係を考へる上に、より大きな資料である元禄十年(推定)十月十一日付、木節・乙州宛去来書簡に於ても同様である。この書簡は『俳人真蹟全集』に見え、杉浦正一郎博士が『俳人去来評伝』(「向井去来」去来顕彰会刊)に詳しく考察されてゐるので、それを再びとりたてて述べる事は控へるけれど、

先以御句被御意忝奉存候。此内多数御さるみのに入集のよし承候而残念存候。其余の内五六句つゝ申受候。木節丈御句は別而後さるにとられたる口をしく候。則此元へ申請候通、此うらにしろし懸御目候。又後さるにも入集のよし承及候通、書しるし懸御目候。

の文面を見ても、『続猿蓑』に多く句を取られて、他の集を編むのにそれを除外せねばならないとしきりに当惑してゐる気配が知られる。その書簡の末尾に近く、

今日浪化集をくり出し、又後さるの入句の聞書をもあらため申候故、日くれかゝり、又夜になり他出仕候。

とある事から、杉浦博士は、「元禄十一年夏刊『続猿蓑』の編集は元禄七年にほぼ終つたものと思はれるが、その全貌を去来は未だ知らないやうであり」と述べてゐられる。全くその通り、今ここに「後さるの入句の聞書」なるものをあわただしく検べるといふ騒ぎをやつてゐる。そして報せてやる木節の五句に、「大分は後猿に入申候よし承及候」と注してやつたが、五句どころか全部『続猿蓑』に入集してしまつてゐるといふ始末である。どうも去来は『続猿蓑』の内容についてはおぼろげにしか知らない、聞書も不十分なものであつたと推断される。とすると、去来が「奉行」したといふ支考のことばにはどうも信が置けなくなる。去来は刊行された『続猿蓑』の原稿は恐らく見てゐなかつたものであらう。そ

れについてのもう一つ、傍証とでも言ふべきものは、『続猿蓑』に入集した去来の六句の中、

万歳や左右にひらいて松の陰

は元禄五年刊の句空編『杵原』に、

のぼり帆の淡路はなれぬ汐干哉

寝道具のかたかたやうき魂祭

は元禄八年刊の史邦の『芭蕉庵小文庫』に、

立ありく人にまぎれてすみ哉

は刊行は遅れるが元禄三年の『よとぎの詞』の中に見える旧作である。

先にくり返し述べた様に、神経質な程、他の集と重なる事に気をつけてゐた去来が、せつかくの芭蕉の撰集に、その事を進んでやるとは思はれず、愈々出板まで、『続猿蓑』の姿には去来は接した事がなかつたと推測されて来るのである。

丈草入集の発句は九句。この多い句数の中で、「ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁」の句が『芭蕉庵小文庫』に見えるのみで、他の句は他集には見えない。最も神経質であり、『続猿蓑』には一番交渉が深からうと思はれる去来の句に限つて、杜撰なのは、天のなせる配剤なのであらうか。去来・丈草「奉行」したとは名ばかりで、去来たちは、『続猿蓑』は芭蕉からかねがね知らされてゐたこと故、出板してもよからうと、認可だけはして、実際の原稿の閲読には及ばなかつたものと思はれる。去来のこの態度は、支考を信頼した上のものであらうし、其角へ贈つた書の中に、続猿蓑の風と格重く記したのもそれを観念的に許した故の事であらう。

なほ『去来抄』の中に『続猿蓑』に関する記事が二箇所ばかり見えるが、『去来抄』が続猿蓑出版後の著であるので、撰集の際の姿を求めるのには適当な資料ではない。ただ、そこでも、去来は『続猿蓑』を否定的には見てゐない事を、念頭にとどめておくべきであらう。

土芳の『三冊子』には一箇所だけ『続猿蓑』の語が見える。そしてその内容は当面の、撰者の問題には別に寄与する事もない。それに宝永元年頃に稿せられたとすれば、『去来抄』と同じ様に扱つていい。ここでは土芳も別段『続猿蓑』への否定的な意見を持つてゐないやうである。

ところが『赤草子草稿』には数度に渡り『続猿蓑』の書名が見える。つまり『三冊子』に整へられる時、それが消されてしまつたのである。

朝露によごれて涼し瓜の泥

此句、自筆に「泥」と有。(消シ此句) 続猿にハ「瓜の土(消シ泥)」と有。さが去来別墅にての句也。窓形に昼ねのござや簾

此自筆(消シ続猿)の句也。続猿にハ「昼ねの台や」と有。後直る歟。

川上と此川しもや月の友

此続猿の句也。白船には「川(上)と此川下と」ゝ有。違也。

十六夜はわずかに闇のはじめ哉

是同集の句也。韻塞には「とり分閤の」と有。白船集<sup>ニ</sup>は、二句に成而入ル。

上の数例は、自分の覚えと、『続猿蓑』との間の句形の相違を報告してゐる。その中、「自筆に『泥』と有。」「此自筆の句也。」は、土芳が芭蕉に親しく接してゐた際等に、記憶にとどめたもので『続猿蓑』になつて、句形が変化してゐる事に不審な感じを抱いたものと思はれる。風国の『泊船集』、李由・許六の『韻塞』との相違も、この方は実際に照合してみたの指摘であらうが、いずれにせよ、『続猿蓑』への一種の批判と考へられよう。不信といふ程の強さではないにしても、いささか割り切れないものを、かなりの句数の変化に感じてゐるものと推測される。

そして殊に、

元禄三年の冬、栗津の草庵より武江に趣くとて、嶋田の駅 塚本が家に至りて、  
宿かりて名をなのらす時雨哉

此句前書、続猿に出る。元禄三年冬ハ大津にとしくれて、乙卯が新宅に「人に家をかへせて我はとし忘れ」と云句をして、奥に「元禄三冬未」と自筆に書て、卓袋に給ふを所持す。続猿草稿の書あやまりか。四年未の冬と覚へ侍る也。

の詞書の誤りの指摘は『続猿蓑』に取つては手痛い傷の暴露である。芭蕉自身なら思ひ違ひする筈はない。筆がすべつたとでもしなければなるまい。この点、越人ならば芭蕉の校閲を経たかどうかにかまひなく論議を発展させかねないであらう。

土芳はこの様にいささかの疑問を持つたが、それが為に『続猿蓑』批判の立場に立つといふ程でもない。先述した通り、『三冊子』の成稿にはそれを消してしまふのである。

許六の『続猿蓑』に対する対し方は少しく厄介である。といふのは、先に、去来の条下で述べた『俳諧問答』に四度ばかり『後猿』の風について筆を及ぼしてゐる。ところで、芭蕉の元禄七年の旅には彦根訪問は果されなかつた。それ故許六の『続猿蓑』への知識は芭蕉からの直接的なものではなかつた。或ひは書簡を以てその編纂の志など伝へられたかも知れないが、どうも多く去来を通じて、多分それも書簡で、知つて行つたやうである。『俳諧問答』は去来の其角への書が契機であり、その文の冒頭に、「炭俵続猿蓑」と現れ、しかもそれが去来の概念としての『続猿蓑』だつたので、一度だけしか持ち出されなかつたと、先述した。許六はそれ故ずばりと言ふ。

其後師上洛し、伊賀にこもりて後猿とかや撰し給ふときく。さぶるのうまみをぬきて、遺經の俳諧を残せりときけ共、板に出ざればしらず。

「板に出ざればしらず」とははつきりと言ひ切つたものである。確かに「板に出でざれば」「知らず」の状態であつたのである。『俳諧問答』(天明板)に元禄十一戊寅春三月於風狂堂述とある。『続猿蓑』の出板は、その五月の事であつた。

去来は概念で、やや先走つて『続猿蓑』の新風を唱へてしまつたが、許六はそれを知らずと、簡単には納得しようとしなない。

玄梅ガ集に、四疊半の巻という俳諧あり。是後猿の趣と見えて、あまみをぬきたる俳諧也。と実証的、また論理的にそれをとらへようとし、また、

今世間の人、後猿の俳諧へかるミありて面白し、これ也とて、筋なき不用の句を出せり。別座敷、炭俵の風熟吟せざる人、いかで後猿の風に飛入事を得むや

と、『別座敷、炭俵』の風とつかんで、『続猿蓑』を次の別なものとして考へようとする。『俳諧問答』の他の所にも「炭俵・別座敷に場をふミ破りて」といふ風に『炭俵』『別座敷』をあが仏として扱つてゐる。これは前年江戸で芭蕉に親炙して指導を受けてゐた時に得た許六にしてみれば芸術の理想像であつたのだから、芭蕉の骨髓を得たといふ確信からも、それを断乎として守り通す気構へであつたものと思はれる。

許六は『続猿蓑』を言はば敬して遠ざける立場に、この時はゐたといふべきであらう。

さて『俳諧問答』のもう一箇所、

今世上に遺經の俳諧の風ハ、天下二三人ならでハあるまじ。伊勢の支考ハ、後猿の時底をぬきて流行すれ共、難じていはゞ実少<sup>スコソ</sup>すくなし。世間門人と日を同して語る人ニてなし。此人體ニ相續して、当時諸門弟の中肩をならぶ人なし

と支考を賞めて、次に『俳諧問答』専宗寺本にはない一句

されどかれが質不実<sup>スコソ</sup>に諂へる心あれば、行末覚束なし

は何時加へられたものか、頗る興味ある所であるが、これと同様な支考評が、後に再び「同門評判」として記されてゐる。

許六はまだ見ぬ『後猿』の風には懐疑的だが、後の『歴代滑稽伝』(正徳五年)には、「杉風餞別に別座敷と云俳諧あり。大概続猿に同じ」と達観して来るし、「俳諧の風体は続猿みのに終る」とはつきりそれを肯定する態度も見せて来る。許六には他に『宇陀法師』(元禄十五年)があるけれど、当面の問題には何も役立つ記事はない。

### 3

さて、『続猿蓑』に対する去来・土芳・許六等の姿勢を仔細に眺めて来て、そこにやはり何かの翳りを感じざるを得ない。もともと到達する結論は初めから定つてゐた。芭蕉原撰支考補撰である。それを荻野清氏の様に、やや明るく、支考の編纂のその頃までの誠実さを信じて、補撰を軽く見るかどうかが問題なのであつた。

論を繰り返すまい。去来の条下に土芳のそれに、様々な不審点を見た。荻野氏のいふ支考への信頼も、『笈日記』はいち早く編まれた(元禄八年)本で、真剣な支考の息づかひが聞かれるやうで、その限りでは彼の誠実さを認めよう。

夏の夜や崩て明しひやし物 翁

是に今宵の賦をくはへて後猿みのに入集す。爰にしるさず。

としたのを、支考のさかしらであるなどといふ意地の悪い見方はしばらく捨てよう。しかし、『続猿蓑』の出版は元禄十一年である。芭蕉の死からこの時までの、時日の隔りを多しとするか、少しとするか。それについて立場が分れるのだが、芭蕉生前に編集の大体が成つたとすれば、編集完了から出版まで、やはり不審の長さであると言はねばならぬ。この間に支考の心に乱れが、生じてゐなかつた、とはどうして言へよう。ここで許六の支考評を思ひ出して見よう。「難じていはゞ実少すくなし」。なほ支考は『笈日記』の旅で、彦根



に三四泊逗留してゐる。その交りの後になされたのがこの評である。すなはち支考は既に純粋な人物ではなかつたのである。危険がはらんでゐると許六はその時に見破つてゐるのである。

かうして、支考の力を加へたのはそんなに軽く見るべきではないと考へられて来る。越人が『不猫蛇』で怒り、『猪の早太』で追撃する、あの激情が根も葉もないものに向けられたとすれば、はなはだ空しい事と言はねばなるまい。

支考の疑はしさの多くは消えた。『続猿蓑』といふ書名は雅致に乏しい故疑はしいといふ議論もとうに止んだ。「密撰」の事も了解された。だが、

伊勢の斗從に山家をとはれて

まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく

芭蕉

の前書の墨消しの不審（志田義秀博士『七部集解説』）はまだ十分に解決されたとは言へないやうである。たとへ旧作を立句として、元祿七年九月四日、支考たちが芭蕉一座の一卷を催したとしても、その事情が支考の『追善之日記』に委しければ委しい程、支考が強く手を触れた前書であるといふ考へが残るのである。それにあの井筒屋の奥書の不審は永遠に晴れない。『続猿蓑』はさういふ翳りを持つてゐる集なのである。その翳りの濃さを確かめて、さて、その作品に深く入つて行くのが、次の仕事であらう。